〔書　評〕

『日本漢字音論考』

高松政雄著

湯沢質幸

1　本書の概要

昭和五七年の『日本漢字音研究』（平成四年再版）と昭和六一年の『日本漢字音概論』に続いて、高松政雄氏の精力的な研究がまたみのった。「後記」によると、著者は本書を第一著に続くものとしているように見える。その理由は、著者において第一著と本書とは研究書で第二著は「概論」という点にあるのでないかと推察されるが、漢字音研究へのいざないを主たるテーマとする第二著も、研究書と言うべき性格を持っており、加えて本書に直接関わる所も含んでいる。[注1]したがって、本書を日本漢字音研究史との関わりにおいて見ようとするなら、言うまでもなく第二著も視野に入れておかなければならない。

本書は既発表の論文に若干筆を加えて一書としたものである。章節名であらましを紹介すると次のようである。

第一章　漢字音、漢字音史　一漢字音史序　二漢字音史（一）　三漢字音史（二）――直音注――　四漢音の清濁　五所謂「新漢音」に就きて若干　六中世仏家に於ける呉音――心空――　七呉音と等韻学――日遠――　八中世的唐音

第二章　漢字音と国語音　一漢字音と国語音　二入声音と促音　三音便――語結合点に於ける音節短縮としての――　四連母音とその融合――字音の和化――　五連声――字音韻尾の和化の過程に於ける――　六合口呼字音の和化――唇的拗音の消長――　七拗音仮名の一の場合――「せうとく（所得）」――　八「按察使―アゼチ」なる読みに就いて――字音語の和化の一問題――

第三章　漢字音研究上の問題　一漢字音研究上の問題一二　二「宜熟習漢音」（延暦11年の勅）――日本漢字音史上に於けるその背景と意義――　三ヴェンクの日本漢字音研究に就いて

第四章　個別論　一「獲」字の音　二「村ジュン」――呉音の一問題――　三「惑ワク」「軟ナン」に就いて　四「不ブ」――慣用音成立の一の場合――　五「准ワイ」――唐音の流布勢力――

〈付論〉漢語論若干　一和用法の字音語――色葉字類抄豊字部より――　二準漢語――色葉字類抄中の「詞」註記語より――　三準漢語の一つの場合――「着」に就いて――

前著や他研究者の論著と比べてみると、一読の内に本書には研究のあり方に関していくつかの特色があることに気付く。まず第一に社会言語学的な観点の重視である。第二に欧米一般言語学の重視である。この点については、実は「後記」に触れる所がある。すなわち《「前著（第一著）は全く井底の蛙的なる視野の下での産物でしか

なかった」という「自覚の上に立って、以後は能う限りに於いてスタンス(stance = Schritt)を広げ、一般言語学的なる、また、所謂言語社会学 Sprach-soziologie 的、乃至、社会言語学 Sozio-linguistik 的なる攻究に、これ力めんとして来た次第である」》と。前著に対する謙辞はともかくとして、このあたりの言葉に著者の並々でない意気込みが感じられる。そして、この二点の重視がすぐさま読者に分かるということは、本書における右のような著者の意図が十分達せられたということを物語っている。なお、右の言葉は「その所為にて、多少は、その言語の本質的なるもの(das Wesentliche)に開眼せしめられたるか、と感得もされるところである」というみずからの評価で結ばれている。次に注目される特色は、これまた「後記」で本書に対するその影響が言及されているギュンター＝ヴェンク氏(一九一六―九三)すなわち昭和二九年から三四年の発行になる『Japanische Phonetik』(『日本音声学』)の重視である。本書においてこの著は、単なる先行研究の域にとどまるものではなくして、方法論さらには研究精神における基盤の一となっている。なお、右の二つに加えては、特に前面に押し出されているわけではないけれども、日本漢字音あるいは日本語音のあり方やその音的変化、また漢字音と日本語音との関連等について、音声学的、音韻論的な追究を積極的に行っている点なども、特色の一つとしてあげうる。

これらの特色は本書の性格を規定するものに外ならない。また、後にも述べるように互いに重なりあい、からみあいながら、そのテーマとの関係から特に第一章一と第二章、第三章とにはっきりと現れている。そこで、しばらくはより関連の強い特色同士をまとめて軸としつつ、これらの章節に焦点を当てながら本書の紹介を進めて行ってみたい。なお、引用文中の〔 〕内は私に加えた部分であり、そしてヴェンク氏の言の引用は高松氏の訳による。

2　社会言語学的観点及びヴェンク氏重視―この観点からの接近は、上代から中古までにおける日本漢字音の形成過程を取り扱っている第一章一や第三章、取り分け後者において顕著である。日本漢字音の歴史はもちろん漢字音そのものの歴史が中心になる。しかし、資料の文献学的な吟味を初めとして、受容のあり方、日本への渡来時期・経路、中国文化伝達手段としての役割など、それを取り巻き、それに対して陰に陽に影響を与えた時代的、社会的な条件なり文化史的背景なりを十分把握してこそ、初めて生き生きとそれを描くことができるはずである。ヴェンク氏の「日本に於ける表記は、朝鮮帰化人の仕事として始まった」という言葉の引用に始まる第一章一は、この章を貫く基本的な立場を述べている。すなわち、「仮名文字登場以前」の漢字資料は「一種の外国資料的にそれを把握す」べきであるとの見方のもとに、漢字渡来時期や経路等を古代文献を用い、一方では日本史、中国史・朝鮮史等を踏まえつつ論じて、平安時代までの日本漢字音の形成過程を追っている。その萌芽を第二著に見ることのできる漢字資料の位置づけはさておくこととしても、ここに示されている方法はだれしも妥当と認める所であろう。それは、社会言語学という言葉がなおなかったころ、あるいは社会言語学という語の使用はともかくとしても、日本語研究においては、すでに古くから、必要に応じて多かれ少なかれこのような方法がとられてきており、そして多大な成果が得られていることによって証明されている。その典型としては亀井孝氏等の編著になる昭和三八年―四

一年刊『日本語の歴史』をあげることができるであろう。いずれにせよ、第三章一の言葉を引用すれば、著者はそのような日本漢字音の「総括的な、体系的な研究を企図するに際して、茲に刮目に価すべき」はヴェンク氏の著作であるとする。ここでのヴェンク氏は社会言語学的研究と置き換えうるが、確かに著者の言うように、これまで社会言語学的な観点に立ち、日本漢字音史の大枠を描いた人物ということになるとヴェンク氏をおいて外にいない。このように見てくると、著者がヴェンク氏の論によりつつ、その深化をはかるにいたったのは必然の成りゆきだったと言えそうである。この点についてヴェンク氏に関わる本書の特色が特に色濃い第三章に移ってみると、著者はその一、二節で、ここでの中心的な話題である奈良末期から平安初期、朝廷によってなされた漢音奨励について、それが当時の政治的な要請により仏教や儒教に対して行われたものであること、しかしながら、漢字音の儀礼的使用の多い仏教においてそれは「空洞化」し呉音使用が続いたことなどを、氏の論にのっとりながらも『続日本紀』等を用いて詳説し発展させている。その結果、本居宣長（天明五年刊『漢字三音考』）以来論じられている、古くて新しい漢音奨励の問題がその背景との関係において明らかにされ、研究に新しい局面が切り開かれている。論中、著者が批判しているように、ヴェンク氏に気付かないまま著者とほぼ時を同じくして私もこの問題についてあい似た意見を述べたことがあるが、第三章は一つヴェンク氏の紹介と発展にとどまらず、今後における日本漢字音研究のあり方を示唆している点において注目すべきものであることを強調しておきたい。

ところで、社会言語学的観点重視の研究は、著者も言及しているようにおのずと学際的ならざるをえない。そして、視野を広げればせよ、広げるほど、より広くより深く他分野の協力を仰がねばならなくなる。日本漢字音研究の場合、理想を言えば、さしあたっては隣接分野である日本文学史あたりから始めて、仏教史、儒教史、外交史、政治史等、日本史関係のこと、そしてさらには中国や朝鮮半島におけるそれなどをひとわたり視野に収めておくべきであろう。ただし、われわれの分野がそうであるように、他の分野でも研究は日進月歩であり、そして論争は尽きることがない。このような状況にあって、他分野の最新情報を集めてその当否を判断し自身の研究の中に取り入れて行くのはなかなかむずかしいことである。この、他分野のことについて私自身不案内なのであるが、二、三やや理解しがたい所があった。例えば、第一章一で今日言う呉音の形成について、著者はヴェンク氏参照のもとで仏教の果たした役割の大なことを述べる。《日本では漢字、漢字音は百済からの「仏教公伝なるイベント」などを契機として「外国文字の japonisieren が飛躍的に加速せしめられたと想定され」「そして、その音の面たる das Sino-japanische とても、茲にてその基盤が据えられ」た。その後聖徳太子の時代における仏教の国教化等により漢字への習熟は促進された。なぜなら「朝鮮、百済にても、その漢字音の結晶期の核になるのは、やはり仏教であったと考えられるからであり、そして、それが殆んど変更を蒙る事なく、中国からの貴重な精神的輸入品として、我が国に順送りされたに相違ない」からだ》と。漢字音が仏教とともに存在した点について異論はないけれども、儒学はそうでなかったのだろうか。また、記録、文書の類における使用音のことは考慮しなくてもよいのであろうか。すなわち、朝鮮半島経由になる、「中国からの貴重な

精神的輸入品」の一つである儒学などもまた、少なくともその読書音を漢音へ交替するある時点までは、百済から来た漢字音の重要な担い手だったと見ることができるのではないだろうか。また、三章において漢音奨励の背景に関して、「新都・平安は、奈良仏教に始まれる僧侶支配の危機から脱出するための具現化物であり、また、その象徴である」とするヴェンク氏の見解をそのまま取り入れてよいのであろうか。この二点は一章や三章の出発点の一つとなっている所なので、いずれ更に説明をつけ加えてもらえたらと思う。著者が「その行文は、決して、観念的、演繹的でなくして、飽くまでも具象的であり実証的である」とするヴェンク氏の、こと日本漢字音形成過程の考察にあっては、政治や仏教等の歴史的な流れにしたがい定められた大枠によって日本漢字音に関わることがらが整理され、位置づけられている。つまり、日本史等に関する情報が先行しているが、そのためであろうか、漢字音関係の情報の位置づけにやや強引さの感じられる場合が時折見うけられる。氏の論が「総括的な、体系的な研究」のモデルの一つであることは動かないにしても、氏から三〇年後の今日、われわれに課せられた問題は、著者のこの度の紹介を機に、他分野にさらに新しい情報を求めつつ氏の方法をわれわれの中に活かしていくことにあるのではないだろうか。ちなみに、第三章三では、氏の漢字音論の紹介と批評を行いつつ今日的な意義を考える、著者のヴェンク論が展開されている。日本漢字音研究者にとって一読すべき論文と思われる。

3　欧米言語学の重視と積極的な音声学的考察

欧米の一般言語学はすでに日本漢字音研究や日本語研究の血となり肉となっているので、その重視か否かの境界を明示するのはなかなか困難である。しかし、日本の同類の他研究書と比べて欧米言語学研究書の直接の参看がはるかに多いことや、これに関わり、ドイツ語の学術用語などが数多く用いられていることなどからそれは容易に知られることである。氏名をたよりに言えば、まずヴェンク氏がその社会言語学的考察を中心として抜きんでて多く引かれており、ついで、カールグレン氏、ジャイルズ氏などが名を連ねる。これら、日本漢字音や中国漢字音研究者はさておくこととすると、最も多く参看されているのは、オットー＝イェスペルセン氏である。あとはだいたい二、三回以下であるが、グリム、ジーヴェルス(Sievers)、ソシュール、ブルームフィールド、ホイットニー、マルティネ等々の諸氏が引かれている。すなわち、主として二〇世紀前半以前に活躍した言語学者が踏まえられているわけである。二〇世紀も終わりに近づいている現在、賛否はともかくとしてこのような研究者が取り上げられていることに、著者における一般言語学とは何かが端的に示されていると言えよう。

さて、言語学的な考察は音声学的、音韻論的な説明の中でなされていることが多い。これは、もちろん本書が日本漢字音や日本語音のあり方や変化の原因等の追究に力点を置いていることと無縁ではない。したがって、言語学的な追究は音そのものを取り扱っている第二章により多く見いだされる。一例をあげてみよう。《中国語で「二重母音(Dipthong)」の遇蟹摂等所属字、あるいは喉内鼻音韻尾を持つ通江摂等所属字の日本漢字音には－aイ、aウなどといった「母音並列が出来する」が、「それをば全てDipthongならぬHiatus〔＝連母音〕として解するのがこちら〔＝日本〕での一大特徴であ」り、「そ

れは彼我の音節構造上の Diskrepanz に依り、彼の一音節は、此の二音節に割られざるを得ぬ」からである（第二章四）》。このように、第二章全体を通じて著者は言語学的な観点を取り入れ、その用語等を駆使しつつ日本漢字音やそれに関わる日本語音の特徴などを整理し呈示している。日本語研究であれ日本漢字音研究であれ言語学の一領域である。したがって、その研究に一般言語学的な視点や知識を積極的に取り入れるべきことは言うまでもない。とはいえ、それを十分に行うのは生なかではできない。その中で著者は改めて意欲的にその一般言語学的な「攻究」を行っているわけである。もとより、社会言語学的な考察の場合もその点においては同様であり、ここに至って、1で紹介した、著者の自己評価の所以がよく理解されるのである。著者の試みは、《言語音の一般的なあり方だとか、他言語に見られる言語学的な現象だとかが、系統や音韻体系の異なる日本語や日本漢字音の、どのような点にどのように適用しうるのか、またそれによってどのような成果があるのか》という、古くて新しい問題にいわば挑戦し、そして翻っては、それを漢字音研究者や日本語音韻史研究者に対して改めて問いかけるものとなっている。率直に言って私には著者の一般言語学的な言及について、一部ややその理由ないしその必要性について理解に苦しむ所があったが、一般言語学に暗い私にとっては、この、言語における普遍性と特殊性の問題、さらには日本漢字音の言語学的な研究とは何かといったことなどが、本書を契機として改めて活発に議論されるようになったらありがたいことである。

日本漢字音研究では、原中国語音受容にあって中国語音の日本語音への影響、またその逆、あるいは日本化の過程などといった問題もおのずと浮上してくる。この問題は昭和四七年度の国語学会大会の分科会[注2]でも取り上げられたことがあるように、日本漢字音史研究にあっては避けて通れない、というより積極的に取り上げるべき性格のものである。したがって、前著にも「国語音」に関する言及はそれなりにあったが、この度の書では第二章でそれを真正面から論じているということになる。これは、とりもなおさず著者の日本漢字音研究とそれに関わる日本語音韻研究の深まりを反映している。さて、この章の第一節冒頭において、著者はまず基本的な考え方を述べている。《「我が国が、本来外国（とつくに）の文字たりし漢字を摂取して、それを以て恰かも『国字』(die japanische Schrift) と見做し得るが如くに自家薬籠中のものとなし行く過程に於いては、他面、当然、その漢字の荷う音体系が亦、我が国固有の語音体系に直接的にか間接的にか、大きな作用力を発揮し来たれるのである。就中に、それは、平安時代にて最も顕著なる現象を呈するとも言っつべ」きである。ところで「元来の五十音図表の枠外に今日位置するものを、便宜上一括して、これを『特殊音（節）』と称する事とする。これは、現今、その固有の五十音図の枠内のものと略々相拮抗する量に上っている」が、その「特殊音の我が国での出来の基盤は」「これをわが方の下地に求めんとする」のがこの書の基本姿勢である。なお、その「特殊音（節）」とは「大略、平安時代全期に相亘って生成され」たものである》と。以下、右の姿勢を柱としてこの方面の研究の遅れていることを指摘し、一般言語学的な観点に立ちつつ漢字音と日本語音との関わり合いの中から生じる入声・促音・連声等の問題を「攻究」する。すでに見てきた所から明らかなように、第二章は第三章とともに著者の並々ならぬ意気込みの認められる所であり、そし

て、その一端がこの章で熱心に行われている、音に関する説明や解釈に現れているわけである。そこには、「これをわが方の下地に求め」ていることなど、注目される発言が少なからず見出されるが、興味深いのは、その説明や解釈が発音・調音、聴覚、知覚、意志、意識、また音的な構造等、いろいろな角度からなされている点である。これは、著者の、場合場合に応じた柔軟な対応の仕方を示しているものと解せられる。が、一方ではそのために説明の基本線がどこにあるのか、分かりにくくなってしまった観がある。説明はその対象によって最も適切なものが選ばれるべきであろうし、またこの種の疑問は著者においてすでに解決済みなのかもしれないけれども、なぜそこでは調音の面から、あるいは聴覚の面から説明が加えられるのか。特に、第二章にしばしば見られる「意識」面からの解釈は、メカニカルな音韻論的分析や用語の使用等と関わって、言語をどのような存在してとらえるのかといった問題や、昭和三〇年代前半に本[注3]誌などでも議論された、メンタリスティックな音韻論とメカニカルなそれとの対立などをも思い起こさせる。

一体、〈国語における〉清・濁とは音韻論に属する概念であって、それは必ずしも音声学上の無声・有声の範疇に合致するものではない。前者の意識内にて、それと識別するのでなければ、後者のみに依って単簡にそれは割り切れはしない。その事は就中に、国語に於けるその文字概念に即せる清・濁に徴するだけでも最早明白である。因って、この濁音の認識、つまり清・濁間の対立関係の認識は、その音声意識の変革を通して成立するのである(二〇七頁)

なお、「元来の五十音図」即「我が国固有の音節を納める」「五音図(Silbentafal)」とは、具体的にはいつごろのどのようなものを指しているのだろうか。この図を想定した意図はよく分かるのであるが、第二章の議論の出発点となるものだけに、「元来」の意、「特殊音」に関わってサ行音の処理、あるいはヤ行のエの取扱いなどについてもう少し説明が加えられるか、あるいは音節一覧表といったようなものが付け加えられていたら、読者にとってその後の議論が理解しやすくなったのではないかと思われた。

4 実証的研究—本書にはもちろん前二著に通じる実証的な研究も盛り込まれている。その典型としては、まず韻学史的な問題を取り扱った第一章六〜八の論文がある。それぞれに個性的なテーマを取り上げているその中で、特に六節には啓発される所が多かった。この節は、心空の『法華経音義』の字音や反切などを他の音義書や韻書等のそれと比較対照しつつ分析し、彼の漢字音韻学が中世韻学にあってなお前代を踏襲したものであることを述べている。第一書の「南北相違抄」を扱った同様の論文などと相まって、従来研究の手薄な中世韻学に新たな研究領域を切り開いている。また、第四章と「付論」でも、手堅い論が展開されている。すなわち、ここでは『魏志倭人伝』や『色葉字類抄』などに現れる漢字音や漢語の由来や意味用法が、内外の韻書・古辞書・古記録等参看のもとで逐一考証されている。細部については若干異論が出されるかもしれないが、地道な調査の積み重ねの迫力を感じさせられた。

4 結語—以上、本書に顕著な特色と実証的な所とに焦点を当てて述べてきた。前者は、主として日本漢字音に関わる種々の事実や

現象に対して理論的な脈絡や解釈を与える議論の中に見いだされるが、これまで述べてきたことから知られるようにそれこそ本書において著者が真っ先に訴えたかったものであると考えられる。その一方、後者も本書全体にわたって随所に見いだされる。つまるところ両者一体となって本書独特のいわば説得性をかもしだしている。「後記」で著者は、《実は「停年退休」前に別の大学に移ったのだけれども、本書は「前著〔第一著〕以来の十年間の時間の推移を反映するのみに留まるに非ずして、加之、同時にこれは・・・その退官記念の、いわば内祝い的なる」書としてまとめたものである》と述べている。第二著の書評[注1]で私は、第二著に続く書の出されることを希望した。本書出版から一年たった現在、おそらく著者はさらに社会言語学的、一般言語学的な研究を進展させたに違いない。また別の新しい視点を取り入れているかもしれない。第四著の出版が待たれる。

——筑波大学教授——

（平成六年六月一日　受理）

注1　湯沢「〔書評〕高松政雄著『日本漢字音概論』」本誌一五〇　昭和六二年

注2　「昭和四七年度春季国語学会大会〔分科討論会記録〕漢字音と国語音——中世を中心に——」本誌九〇　昭和四七年

注3　浜田敦「国語音韻体系に於ける長音の位置——特にオ段長音の問題——」、服部四郎「〔入門講座〕音韻論（一）」本誌二二　昭和三〇年、浜田「音韻論的解釈」同二四　昭和三一年、服部「音韻論（二）」同二六　昭和三一年、「音韻論（三）」同二九　昭和三二年など。

＊　なお、一、二章の数節については、清水史「平成二年・平成三年における国語学会の展望　音韻（史的研究）」「国語学」一六九　平成四年、に簡にして要を得た紹介と批評がある。

（平成五年六月十五日発行　風間書房刊　A5判　六五八頁　一七五一〇円）